

途上国における貧困との関わりによる自身の教育に対する意識変容

佐々木 すみれ (10112040)

1. はじめに

近年、世界的な動向として、大学生の留学者数が増加している(池田 2011)。留学による効果として、国際理解や語学力の向上に加え、国境を越えた幅広いネットワーク形成の育成が期待されている(文部科学省 2008年)。しかしながら、日本において留学者数は2004年をピークに減少しており(池田 2011)、グローバル人材育成における課題である。一方、国内における大学生の留学支援が取り組まれているが(文部科学省 2017)、留学者自身の学びや成果について言及された研究は希少である。グローバル化が進む近年において、国内外での活躍が期待できる若い世代を育成していくためにも、海外での学びの過程を分析し、可視化することは意義があると言える。

そこで、本研究は途上国における貧困との関わりによる意識の変容について、筆者自身の経験を可視化することによって明らかにすることを目的とした。

2. 分析の手続き

筆者は、2016年6月から12月までのおよそ半年間、東南アジアおよびアフリカの途上国を中心に16カ国を訪問した。その際に、手書きによる日記と電子データによる日記の2種類の記録を残した。手書きの日記は筆者の感情面を中心に記述した。一方、電子データとして保存された記録は、貧困や教育に関わる事項を中心に、他者に伝えることを意識しつつ記録した。本研究では、自身の経験や感情について、比較的客観性を有している、電子データによる記録について分析した。まず、12ヶ国における記録をすべて文章で区切り(786文)、カテゴリに分類して名称をつけた。さらに、国別に記述量が異なっているため、カテゴリ数を算出するとともに、各国におけるカテゴリの頻出割合を示した。なお、本概要においては、筆者の意識変容に関わりが大きいとされる4ヶ国について述べる。

3. 貧困との関わりと意識変容の実際

表1に結果の概要を示す。ミャンマーにおいて、もっとも多く抽出されたカテゴリは、「貧困の実態(45.7%)」であった。また、次に多く抽出されたカテゴリは、「自問自答(8.9%)」であった。筆者は、やせ細った親子が物乞いもせずじただ座っている様子に遭遇するなど、ミャンマーにおける貧困の実態について知った。そこで、筆者が貧困における教育の重要性について迷いを持ち、自問自答する様子が記録から読み取れた。

インドにおいて、もっとも多く抽出されたカテゴリは「施設の実態(73.2%)」であった。また、次に多く抽出されたカテゴリは「貧困層に対する心情(7.2%)」であった。なお「施設」とは、筆者がボランティアとして活動した精神障害者支援施設のことである。インドでの記録は、多くが「施設の実態」についての記述であり、筆者にとって印象が強かったことが伺える。また、筆者は帰国後に孤児院で働くことも視野に入れていたが、患者に対する感情移入の度合いが大きいことから、ボランティアとして活動することに迷いを持ち始めた。

エチオピアにおいて、もっとも多く抽出されたカテゴリは「訪問先の実態(20.4%)」と「貧困層の実態(20.4%)」であった。

また、次に多く抽出されたカテゴリは「自問自答(19.4%)」であった。訪問先と貧困層の実態がもっとも多く抽出された理由は、当時エチオピアの政治体制が不安定になっており、貧富の差が明確だったからであろう。また、エチオピアにおける「自問自答(19.4%)」の頻出割合は、他国と比較してもっとも高かった。筆者は、初めて貧困層から金的支援を求められた。教育が最たる支援方法だと考えていた筆者は、支援方法の理想と現実には差があることを知り、支援の方法について、自問自答した。また、筆者は現職の小学校教員であるJICA隊員A氏と出会い、日本での現場経験を生かしながらエチオピアの児童や教員と関わっている姿に憧れを抱く。また、A氏の自宅におよそ一週間宿泊したことで、JICA隊員の実態を知り、教員でありながらJICA隊員として、途上国に関わる自身をイメージした。以上の経験を通して、筆者は教員になることを視野に入れ始めた。

ケニアにおいて、電子データによる記録を残すことができず、手書きの日記による記録のみしかなかった。しかしながら、筆者の意識変容に大きな関わりがあったため、以下に具体的事例を示す。筆者は、シンナーを吸う少年Bと出会い、助けを求められるが、何もすることができずに無力感を覚えた。また、学校に行けないために教養を身につけられないストリートチルドレンを見て、彼らの将来を不安に思う。そこで、彼らが自立できるだけの教養を得るためにも、筆者自身が教員となり、現場の経験やスキルを身につけることが重要であると考えた。

表1 困との関わりによって変容した筆者の教育に対する意識

訪問国	貧困との関わり	教育に対する意識
ミャンマー	物乞いもせず座り込んでいる親子を見て、支援の難しさを知り自問自答する。	教育が貧困支援に最も必要なか迷う。
インド	宗教上国内の貧富の差が激しい、3カ国目になり、貧困にも様々な形があることを知る。	患者に感情移入しすぎるため、ボランティアに向かないと考える。
エチオピア	教育が最たる支援方法だと思っていたが、金的支援を求められ、支援方法について自問自答する。	現職小学校教員であるJICA隊員に会い、途上国の教育に関わる方法を知る。
ケニア	シンナーを吸うB氏との出会いで、自身の無力さを知る。	現場スキルを身につけて途上国で教育をしたいと考える。

4. まとめ

本研究は、途上国における貧困との関わりによる意識の変容について、筆者自身の経験を分析し、可視化した。その結果、筆者の考える貧困支援は、教育であると考え、教員を目指すようになった。また、16カ国を訪問したことで、様々な文化や考えの違いに遭遇し、日本との違いに興味をもつとともに、自身の視野の広がりを感じた。

参考文献

池田庸子(2011) 海外留学の意義とメリットを考える、ウェブマガジン「留学交流」7月号
(指導教員 瀬戸崎典夫：初等教育講座)